

26日 木曜

Iコリント

11:27 したがって、もし、ふさわしくないまでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すことになります。

11:28 ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。

11:29 みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくことになります。

11:30 そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいいます。

11:31 しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。

11:32 しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められるとのないためです。

11:33 ですから、兄弟たち。食事に集まるときは、互いに待ち合わせなさい。

11:34 空腹な人は家で食べなさい。それは、あなたがたが集まることによって、さばきを受けることにならないためです。その他のことについては、私が行ったときに決めましょう。

主の晩餐から話題は聖餐に移ったような印象を受けますが、元来初代教会では主の十字架を覚える「聖餐」は、食事と一緒に行われたようです。それ



Bible Reference
聖書の記述

ほど教会では交わりにおいて食事が大切にされてきたのです。ユダヤの伝統でも、食事を共にするのは家族であり、また同じものを食べることによって同じ身体が作られると思われていたのです。

それでパウロは「自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい」と言っています。これはあきらかに聖餐のことです。「みからだをわきまえないで、飲み食いする」とは一義的には、自分勝手に食事をすることですが、「みからだ」とありますから、十字架にかかられたイエス様のみからだであり、その救いの確かさと愛の限りなし、そしてみこころの敵かさということでしょう。

そのような主のみからだの意味、すなわち十字架の意味をわきまえないで勝手に「飲み食いするならば」、主のさばきを自ら招く結果になるというのがパウロの教えるところであり、戒めとしてコリントの教会の実例が挙げられています。ただしここにあるような「さばき」も、クリスチヤンに対しては、永遠の滅びではありません。「世とともに罪に定めされることのないため」とありますから、悔い改めて「わきまえる」者となるためです。

それにしても私たちは、主からさばかれる前に「自分をさばく」ようでありたいと思います。すなわち、主の聖餐において十字架のイエス様のみからだをわきまえているか、聖餐に関連して食事などの交わりにおいて自分勝手ではないかどうかをよく吟味して、みこころを知って従うということです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

